

御所のなかでゆっくりいた。拝観終了の鐘の音にしかたなくひきあげた。出がけに先生はおみやげにお菓子をお買いになった。わたくしは道喜のちまきを買った。(昭和二十一年九月卒、京都市立堀川高校教諭)

### 後藤丹治先生を憶う

柿谷雄三

後藤丹治先生がお亡くなりになられたといふことは、わたくしにとつてかなりな打撃であつた。先年龍谷大学でお倒れになつたことがあつたと、ある人から聞いてはゐたが、その後お元氣になられたといふことだし、御著書もつぎつぎとお出しになるし、また本年度から皇学館大学の方へも御出講になると聞いてゐたので、このころは大変お元氣だと思ひ込んでゐた。そこへの訃報はあまりにも急なことで、到底本当とは思はれなかつた。ともあれ、今ここにこのやうな一文を草さなければならなくなつてしまつたことは、何としても悲しいかぎりといはねばならない。思いつくままに、先生のことども一つ二つを記して先生を偲びたいと思ふ。

わたくしは在学中、専攻する時代が違つていた関係上、先生のお宅へはあまりお伺いすることはなかつた。ために残念ながら手にとつての御指導を仰ぐ機会にはめぐまれなかつた。しかしながら、教室において、またその優れた数々の御著述や論文を通じて、学問研究がいかなるものであるかをお教へくださつた御恩は実に測り知れないものがある。謹厳実直な御人格と、手堅い実証主義の御学風は、わたくしの「心の師文」として常に敬慕申しあげていたところであつた。あの折目正しい徹底した御講義ぶりは先生のお人柄をよく表はしていたし、聴講するわれわれはほんとに息もつぐ間がないぐらゐであつた。

先生はまた朗読がお上手であられた。先生の講じられた平家物語、太平記、雨月物語、そのに滝口入道などといった諸作品は実に名文の箇所が多いが、それらをよく独特の節をつけてお読みになつたものである。静まりかへつた教室に朗々と先生のお声が流れるあの瞬間は、先生の講筈に列つた誰しもが、終生忘れえないことであらう。今も先生のお声が耳もとに聞えてくるやうな気がしてならな

い。  
わたくしはこゝ一、二年平家物語を教へることとなつたのであるが、これも何かの因縁であらう。それも大学院で承つた「日本文学作品研究——平家物語——」のノートを参考とさせていただき、お教へを受けたいろいろのことを思い起しながら、たどたどしく進んでいるやうな次第である。昨秋十一月二十二日、清水泰先生の学位祝賀会の席で、先生にお目にかかつた時、その事を申しあげ、お暇になれば集中講義にお越しいただいて、その不備を補つていただくやうお願いしていたのであるが、もうそれも永遠に実現できなくなつてしまつた。思えばその時が先生に最後にお目にかかる日となつてしまふとは、誰が予想しえたであらうか。

ついでこの間、文庫の整理をしてゐると、思ひがけず先生のおはがきが出てきた。つれづれ草の文ではないが、「ただその折の心地」がして胸せまるものを覚えた。日附を見ると、昭和三十三年の「八月八日」とあり、たしか、先生の「椿説弓張月」上巻(日本古典文学大系)が上梓されたので、暑中お見舞か

たがたお祝いを申しあげた時の返事にくださったものらしかった。そして先生独特の藤原定家を思はせるやうながつちりした筆蹟で、「弓張月上巻のみやつとできました。このあと、岩波四冊、朝日の太平記五冊、有精堂の兩月物語評解一冊を四・五年の間に片附けねばならなくなり、困却しています。」と記され、短い文章の中にも先生のお仕事への意欲を窺うことができた。この中で記しておられる岩波の四冊(弓張月下巻・太平記三冊)はすでに世に出、朝日新聞社の日本古典全書太平記も一冊をお出しになられた。晩年の先生は実に矢つぎ早やに著書を出され、これらのお仕事の完成に心血を注いでおられたやうにお見受けする。それにしても、まだまだなぞつていただきたいお仕事があまにも多かつた。未刊の右に記したお仕事(太平記(以下、兩月物語評解)は勿論のこと、高山樗牛の滝口入道の注釈もまともにおられたやうであるし(「洛味」復刊第三集所収『滝口入道統説』、先生の学位論文と承る兩月物語に関する御研究も、是非出していただきたいものである。頼原退蔵博士や池田龜鑑博士のお仕事)がその歿後、知友、門人の方々の手を経て

数々出版されたやうに、先生のお遺しになった多くの優れたお仕事は、できるかぎり後の者が整理して世に出すように努めねばならぬと思ふ。これはひとり先生の遺業を讃えることにとどまらず、学界のためにも益するところが甚だ大きいと思うのである。

先生を偲ぶことどもは尽きない。しかし思ひばかり馳せて、筆の方は一向に進まない。これというのも、わたくしの心のどこかに先生を失つたさみしさが、よほどこたえていたためであらうか。(三八・六・二三)  
(昭和三十三年七月大学院卒、相愛女子短期大学講師)

### 誠実謙虚な先生をしのびて

金子 清明

文科に学部が出来て五年目、まだ法文学部といった頃——昭和十九年に入學して初めて私どもは後藤先生の声咳に接した。温厚真摯な先生の講義を時には間だるっこいような氣持で、今から思うと不遜な恥しい考えをもつた事もあつたが、いつどんな場合でも少しも

変らない先生の温情と、自信に満ちた熱意のある講義に対して、レジスタンスを事とするような学生もすっかり心服してしまった。当時戦況の悪化から敗戦へ、そして戦後処理と万事につけて条件の不備な中で学習であつたが、先生は暖房設備もない停電がちな教室で、学生が一人二人しかいないような場合でもいささかの緩みもない態度で講義を続けられた。全国的な食糧事情の悪化欠乏と厳しい食品統制の世相にあつて実直な人ほど栄養失調の著しい頃であつた。先生のお小さい体格が一層細々としていてよく講義に耐えられると思うほどであつた。しかし休講の事は稀であり、先生の欠講は何か余程の場合であると皆が危惧する有様であつた。そして先生と話し合つて寒い冬の期間など、学校の向い側にある先生のお宅へ伺つて心安く家族的な雰囲気の中で講義を受けるような事もあつた。

深い造詣をお持ちの先生に我々は思う事を遠慮なくお話できる間柄となり、先生はいつにもこやかに親身に應對して下さつた。講義の中では「六代勝事記」や「滝口入道」など印象深いものであつた。「滝口入道」は中学の頃から何べんか読返してきた好きな小説で